

語り継がれた伝承民話②

殿様を叱った百婆様

岡垣歴史文化研究会 石井 邦一

この度も、野間での話である。

福岡藩主だった黒田長薄は、十二代続いた福岡藩の十一代目の殿様である。

長薄は、鹿児島藩主島津重豪の九男で、福岡藩主黒田斉清の養子となり、天保五年（一八四四）に二十三歳で福岡藩を継いでいる。幼少年期の長薄を可愛がった姉の茂子は、十一代將軍家斉の奥方で、福岡藩主となった長薄を何かと援助したと言われる。彼は蘭学を好みわが国で最初の種痘の実施や、製銃所・精錬所を建てるなど進歩的で気さくな殿様として知られた。

福岡藩主となった長薄は、領内の実情を把握するため、努めて領内を巡察したが、これはそのときにあった話である。

野間村の百姓辻正平の祖母は、若くして糠塚村から野間の新蔵

に嫁ぎ二男二女を儲けたが、家が貧しいため織縫に努め農事に励んだ。やがて次男を分家させ女子も無事に嫁に出した。七十歳になる前に夫の新蔵を亡くし、今は長男の新八と過ごしていた。

かくして安政四年丁巳（一八五七年）の春、百歳を迎えたとして、藩から敬養扶助米五俵を賜わり、遠賀郡役所からも毎年五俵が与えられた。

この褒賞を受けた老婆はこれに酬いるために、自ら織った布を殿様に献上した。ことのほかこれを喜ばれた殿様は、さらに米七俵を授けられた。

百歳でもまだまだ豊饒としていて、日々、家事の手助けに余念がなかった。

秋晴れのその日も、息子夫婦が野良仕事で出かけた後、一人で家の留守番をしていた。

家の前庭には、俵拵えした三

俵の米俵が積まれていた。

そこに突然、袴纏股引姿に一刀を帯びた侍が、つかつかと庭に入るや、積まれた米俵の上にとっかかりと腰を下ろした。

家の中からこれを見ていた老婆は、家を飛び出し大声で「どのどいつかあー。それはお殿様に献上する御米なるぞー。早く降りたてよ！」と怒鳴った。

老婆の激しい剣幕に、殿様は思わず俵から腰をあげたものである。追いかけるように、そこに藩主に近習する家来や村役人たちがやってきて、老婆に「あれはお殿様なるぞ」と叫んだので、たまげた老婆は家の中に隠れた。

殿様は「あの婆アー達者なり。手自ら遣わすものがあるので連れ来たれ」と家来に命じ、家の中に隠れていた老婆を懇ろに諭して、殿さまのお側に連れてきた。

殿様はご立腹どころか、「この米を余の所に上納するとて、さほどまで敬いおくその段、満足に存ずる。いちじの褒美とてこれを遣わす。なおますます保養せよ」と仰せられ、お手ずより御金子を賜った。老婆はただただ感涙に噎ぶのみだった。

その後、郡奉行所に息子の仁平が呼び出され、さらに衣服を賜る旨のお墨付きが下された。

この老婆は百三歳になった年に、再度の「紐解き」（女兒が七歳になった祝い）と唱え、片道十九丁もある高倉神社まで歩いて詣でたと言う。墓には、福岡藩士の尾崎弥左衛門（福岡藩の勤皇派弾圧で切腹）による墓誌が刻まれている。



▲野間の集落